



GAUDETE

推進本部だより

カトリック広島司教区平和の使徒推進本部

2014-2016年度広島教区年間テーマ

チャレンジ 新しい福音宣教 わたしをお使いください
— 家庭へのチャレンジ —

慈悲(ミゼリコルディア)のわざ

※大勅書抜粋

行って、同じようにしなさい

(ルカ 10・25-37 参照)

7月1日は、福者ペトロ岐部司祭と187殉教者の記念日です。

ヨアキム九郎右衛門は、188福者のうち広島教区内で殉教した5人の中の一人です。

「彼(ヨアキム九郎右衛門)は、有徳のひとであり、柔和と謙遜において卓越していた。祈りを好み、そのため長期にわたって『慈悲役』の仕事に勤めた。」と、1624年度の「イエズス会年報」に記録されています。

『慈悲役』とは、病人と貧者、また埋葬の世話をすることが主な活動でした。迫害が厳しくなった時代は、司祭が不在の時には、幼児に洗礼を授け、信徒や洗礼志願者に教理を教える役も果たしました。

1613年度の「イエズス会年報」には、「広島では一人のハンセン病者が洗礼を受けてから、ハンセン病病院を建てた。」という記録があります。

現代のような病院ではなかったでしょうが、「慈悲(ミゼリコルディア)のわざ」が、広島のカリシタンたちの信仰生活の特徴であったのです。

フランシスコ教皇は、「いつくしみの特別聖年」に、わたしたちが、身体的な慈悲のわざと精神的な慈悲のわざに励むよう勧めています※。

400年前の広島のカリシタンたちを模範として、わたしたち一人一人がみな、それぞれの場にあつて、『慈悲役』としての使命を果たせるよう努めましょう。



わたしの心からの願いは、この大聖年の間にキリスト者が、身体的な慈悲のわざと精神的な慈悲のわざについてじっくりと考えてくださることです。それは、貧困という悲劇の前にして眠ったままであることの多いわたしたちの意識を目覚めさせ、貧しい人が神のいつくしみの優先対象であるという福音の核心を、よりいっそう深く理解するための一つの方法となることでしょう。イエスの教えは、わたしたちがその弟子として生きているか否かを理解するための、慈悲のわざの数々を示しています。身体的な慈悲のわざをあらためて見てみましょう。飢えている人に食べさせること、渴いている人に飲み物を与えること、着る物をもたない人に衣服を与えること、宿のない人に宿を提供すること、病者を訪問すること、受刑者を訪問すること、死者を埋葬すること——、これです。さらに、精神的な慈悲のわざも忘れてはなりません。疑いを抱いている人に助言すること、無知な人を教えること、罪人を戒めること、悲嘆に打ちひしがれている人を慰めること、もろもろの侮辱をゆるすこと、煩わしい人を辛抱強く耐え忍ぶこと、生者と死者のために神に祈ること——、これです。

サマリア人は真のいつくしみをもって行動します。彼は傷に包帯を巻き、その人を宿屋に連れて行って自ら介抱し、救援の手配をしました。これらすべてのことは、あわれみや愛は漠然とした気持ちではなく、金銭を払ってでも他者を介抱することであることを物語っています。それは、進んで人にかかわり、他人を自分と同じように考えるところまで、その人に「近づく」ために最善を尽くすことを意味します。「隣人を自分のように愛しなさい」。これが主の命令なのです。

たとえ話が終わったあと、イエスは律法の専門家に聞き返します。「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」(36節)。答えはまったく明らかです。「その人を助けた人です」(37節)。たとえ話の始めには、祭司とレビ人にとって、隣人は死にかけている人でしたが、最後には、寄り添うサマリア人が隣人となります。イエスは視点を逆転させています。見かけだけでだれが隣人であり、だれがそうでないか区別しないでください。皆さんは、これから出会う困窮している人すべての隣人となることができます。そして自分が心からあわれに思っているかどうか、すなわち他者とともに苦しめるかどうか分かるのです。

教皇フランシスコ、2016年4月27日の一般謁見
演説 抜粋

(カトリック中央協議会 訳)

教皇フランシスコいつくしみの特別聖年公布の大勅書「イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔」P.26 第15項第2段

(カトリック中央協議会 訳)

主な教会暦(主日を除く)

07月01日 福者ペトロ岐部司祭と187殉教者(記念日)

07月25日 聖ヤコブ使徒(祝日)



(ホームページ)